

## 福祉ネットワーク



調理を教える店長の長袋さん（右）



横浜にあるK2の経営するお好み焼き屋

行政や企業に働きかけましたが、協力を得るのは難しかったといいます。若者の就労支援を研究する樋口明彦さんはK2の本部を訪ね、就労支援の責任者、岩本真実さんに伺いました。

「就労支援といわれて職場体験などをを行う場合、普通は、ほかの団体や施設などと協力してやるじゃないですか。ネットワークを作つて協力してやりましょう」という具合に。そうすることのほうが多いと思うのですが……」（樋口）

「どんどん外に送り出していくといふ」という気持ちはあるけれども、今現実にその子が働く場がなくてそのままひきこもってしまうのなら、その子が働ける場をまず作ることのほうが大事で、行政が働くのを待っていたり、ほかの人たちの同意を得るのを待っていたら、たぶんそのときにはもう遅いと思っていて」（岩本）

そんな思いからK2は、一九

店長の長袋さんも不登校の経験があります。西牟田さんの気持ちがよくわかるため、せかすことはありません。

トータルに若者をみていくたい

現在、職業体験の場は、お好み焼き屋をはじめ、清掃や給食センターなど八か所、全体で七〇人あまりの若者が働いています。

こうした職業体験を経て多くの若者が就労につながりK2を立ちました。

行政や企業に働きかけましたが、協力を得るのは難しかったといいます。若者の就労支援を研究する樋口明彦さんはK2の本部を訪ね、就労支援の責任者、岩本真実さんに伺いました。

「就労支援といわれて職場体験などをを行う場合、普通は、ほかの団体や施設などと協力してやるじゃないですか。ネットワークを作つて協力してやりましょう」という具合に。そうすることのほうが多いと思うのですが……」（樋口）

九年お好み焼き屋をオープンします。自ら職業体験の場を作ったのです。

ひきこもりやニートの若者が働きやすいように三つの段階を設けました。就労体験の乏しい若者にはさまざまな現場で経験を積み仕事の楽しさを実感してもらいます。慣れてくれば契約社員になります。給料をもらい責任ある立場で接客や調理を行います。

こうした経験を通して、最終的に社会に出て働くことをめざすのです。

西牟田さんはこの店で皿洗いからスタートして経験を積み、去年、契約社員になりました。苦手だった接客も今では自然になれるようになり、現在では店長の長袋さんとの指導を受け、調理にも挑戦しています。



ひきこもりのころを語る  
西牟田智弘さん

## 福祉ネットワーク

### シリーズ 地域からの提言 第四回

#### 若者と社会を結ぶ

～神奈川県横浜市～

放送抄録 2010年6月8日・8月11日放送／6月15日再放送



経済不況が長引き、雇用情勢が厳しさを増すなか、ニートやひきこもりなど悩みを抱える若者たちにさまざまな職業体験の機会を与えて、就労につなげようという横浜市の民間就労支援団体の取り組みについて紹介します。

#### お好み焼き屋という 就労支援の場

横浜の繁華街に、スタッフ全員がかつて不登校やひきこもりを経験した若者というお好み焼き屋があります。

この店を経営するのは、長年若

K2インターナショナル 岩本真実（いわもと・まみ）  
法政大学准教授 樋口明彦（ひぐち・あきひこ）  
聞き手 町永俊雄（まちなが・としろう）

西牟田智弘さん

者の支援を行ってきたK2インター・ナショナルです。仕事の段取りや客とのコミュニケーションなど職業体験を通じて、社会に出ていくための力を身につけさせることをめざしています。

ここで働く三歳の西牟田智弘さんは、K2に入るまではひきこもりの生活でしたが、今では週五日勤めるようになりました。今は親元を離れK2の寮で暮らしています。

そこで西牟田さんは、K2に入るまでひきこもりではなかったといいます。

西牟田さんは、高校一年のとき、学校生活に悩んで退学、その後三年間、自分の部屋にひきこもり、家族以外の人と接する機会はありませんでした。かつては生きる希望を失っていたといいます。

「あれは生き地獄と思っていますね。ずっと普通にテレビを見て、ただ寝て……。あとは何にもすることがない状態で、早く外出したいという気持ちはあるのですが、外に出るのが怖い自分もいるんですね。何もできなくて、

K2が誕生したのは二〇年前、ヨットでの航海などの活動を通して不登校やひきこもりの若者の支援を始めました。

そうした中、社会に出たあと仕事をつくことができず再びひきこもってしまう若者が多くいることに気づくようになりました。職業体験の必要性を感じたK2は、

#### 支援者が自ら働く場を

K2が誕生したのは二〇年前、ヨットでの航海などの活動を通して不登校やひきこもりの若者の支援を始めました。

そうした中、社会に出たあと仕事をつくことができず再びひきこもってしまう若者が多くいることに気づくようになりました。職業体験の必要性を感じたK2は、

どうしたらいいのか、という気持ちで……」（西牟田）

五年前、西牟田さんに転機が訪れます。K2の存在を知った兄から入るよう勧められ、自ら考え、K2に入る決断をします。

# 福祉ネットワーク



職業体験の場として地域に広がるにこまる食堂



低価格でランチを提供するにこまる食堂

そのためには本当に関心のない人でも、気がついたら参加しているというような仕組み、仕掛けがいると思うのです」（岩本）

岩本さんは、にこまるの食堂に参加してくれる飲食店を増やそうと、今積極的に営業活動を行っています。そして、にこまるの食堂に加盟した店には職業体験も合わせてお願いするようにしています。

K2では今後も、にこまるの食堂を通して地域に若者支援の輪を広げていこうと考えています。

## 社会的な連携につながる仕組み作り

町永 取り組みを地域に広げていくのはなかなか難しいと思うのですが。

樋口 どうしても若者の支援をお願いするという、相手の善意にお願いするというのが普通だと思ふのですけれど、今回のこととは逆転の発想だと思うのです。

つまり、若者を中心として考え

るのではなくて、地域の人ができるることをしていけば、その延長線上で、そのままなんらかの社会的な支援に連携していくといふ、そういうおもしろい仕組みなんじゃないかなと思いました。

町永 こうした居酒屋さんみたい

なところが、それぞれが受け皿になれば、地域そのものが変わっていくということで、大きいんじやないです。

岩本 そうですね。そんなに大きなアクションを起こさなくとも、共感してくれるお客様がここのお店にたくさん来てくれる。これが、セーフティネットだなと思います。

町永 ところで生きづらさを抱える若者の就労支援というのは、どんなにきめこまかいプログラムを作つても、最終的に現実社会に果立ついくとする、その厳しさゆえに戻ってきてしまうということが多々あると思うのですが、そこは岩本さんはどんなふうに考え

ていらっしゃいますか。

岩本 逆に私たちはいつでも戻っていいよというふうに言っています。

それが私たちのよしな民間団体のいいところで、横浜根岸のお好み焼き屋さんは二〇年やっていますけれども、一〇年前に支援しておられた若者がぼつと訪ねてきました。何かちょっとつまずいたときには相談できる場所でもありますけれども、つまずいたときに相談できる場所でもあります。まだやり直せるということが大事だと思います。

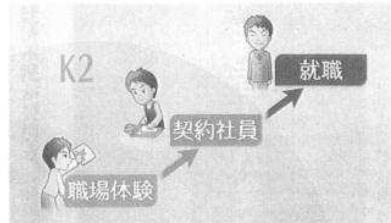
樋口 私たちの今の社会の考え方飛び石みたいになつていて、学校があつて、次は会社に、というけれど、その間に何もない池が川に落ちてしまうような状況になつてるので、そこをいつでも戻れるような、できるだけ多くの人が戻れるような場所を作ることが大切だと思いますね。



法政大学社会学部准教授  
樋口明彦さん



K2インターナショナル 就労支援  
事業 認証責任者 岩本真実さん



K2の考える就労までの三段階

樋口 今までの就労支援というと

どうしても、目的がはつきり決まついてスキルを身につけるとか、

あるいはそれにふさわしい態度を身につけるということだったと思

うのですけれど、ここはそうでは

ないかなと思いました。

岩本 岩本さん、もう一つの特徴

は共同生活と就労プログラムが一

緒になつていますが、これはどう

いう意味合いなんですか。

岩本 私たちはトータルで若者た

ちを見ていきたいという思いがあ

つて、共同生活がいちばんのベ

スにあるのです。

いろいろな状況の中ですぐ渴いた状態にある若者たちが、充電期間を通じて仲間と一緒に過ごしたり、家族のような関係の中で過ごして、生活スキルを身につけていきます。その上で本当に具体的な就労スキルを身につけなければ、

仕事についても、やっぱりやめてしまうとか、長続きしないということがあります。

岩本 お店では、店長から西牟田さんが教わっていましたね。店長も実は不登校だった経験がある、そういう関係性が大事ですか。

岩本 そうですね。目の前に自分も頑張ればこういうふうになれるという先輩がいるということはすごく大事ですね。自分がどういうステップを踏んでいけばこうなれるのかというのを見せてあげることが、すごく彼らの希望になると思っています。

町永 お店では、店長から西牟田さんもロールモデルというか、自分も頑張ればこういうふうになれるという先輩がいるということはすごく大事ですね。自分がどういうステップを踏んでいけばこうなれるのかというのを見せてあげることが、すごく彼らの希望になると思っています。

岩本 お店では、店長から西牟田さんも実は不登校だった経験がある、

仕事についても、やっぱりやめてしまうとか、長続きしないということがあります。

岩本 お店では、店長から西牟田さんが教わっていましたね。店長も実は不登校だった経験がある、

地域の人たちにも好評です。

K2は、二五〇円という低価格を実現するためにさまざまな工夫を取り入れています。中でも重要なのが地域の力を借りることです。

岩本 お店では、店長から西牟田さんは八百屋から安く仕入れた食材を販売することです。

樋口 お店では、店長から西牟田さんも実は不登校だった経験がある、

地域の人たちにも好評です。

岩本 お店では、店長から西牟田さんは八百屋から安く仕入れた食材を販売することです。

岩本 お店では、店長から西牟田さんも実は不登校だった経験がある、

地域の人たちにも好評です。

岩本 お店では、店長から西牟田さんも実は不登校だった経験がある、

地域の人たちにも好評です。